

慄き

ふるえることのない硬質な線に囲まれ
私は安堵もなく怯えている
あたかも厳格な看守の監視に晒されているかのように

重量というものを超えた巨大な質量を
大気ではない空気が抱いている
全くの意図を有さず、立体を平面へと押しつぶすプロセス

黄緑色に、LEDが激しく点滅している
すなわち、空間を必要としないMASSとして
我々もいつかは、そのように還元されるのだろう

飼い馴らされているという意識を芽生えさせぬよう
いたる所に仕掛けられた、無数の手錠付き自由
デザインという狡猾なカモフラージュ

にこやかな表情で語られる契約条件
その向こうに、ひっそりと身構えているシステム
信用さえも委託した——共同体という名の袋網

その陰で、静かに降り積もり続けるもの
即ち、遺棄され、放置された「わたし」の破片が
酸化し、憎悪へと変質してゆく

彼が血を求めている——その理由は単純だ
傷つけたとことの証が、はっきりと
生々しく確認できるように、とのことに過ぎない

微動だにせぬ線で構成されたものたち——

我々はその中で、常に慄いている
空間の収縮と消滅の時が動き出すのを・・・

(2013.6.9)